

## 往復書簡

今回は、安達氏（山形県 南安達農園）と当機構理事長の高木勇樹との往復書簡2回目です。

拝啓 高木 勇樹 様

年の瀬になり山形にはない群馬の冷たい風との戦いが始まりました。野菜の収穫も順調に進んでおります。

お返事ありがとうございます。これからますます寒くなりますので、お体には十二分にお気を付けてください。

高木様がおっしゃるように、農業界だけでなく他業界でも親のあとを継ぐのがラッキーと感じる息子と、プレッシャーと感じる息子に分かれるのでしようね。私は後者で、ラッキーと感じることはできなかったことを後悔しております。跡継ぎの問題は、私だけでなく、大小なく農業界ではあるものと考えております。

息子たちは新しい生産技術や経営を考え実行したいが、親からは「自分で経営した時にその考えを実行すれば良い」と意見は平行線のままになることが多いのではないのでしょうか？農業は一経営者ですが、ここに親子という関係性が双方とも抜けないから起こりうることなのだと考えます。この上下関係が他人だったら違う結果が起きているのではないのでしょうか。自分が携わっている仕事に対し、お互い悪くしようと思えば出す人はいないと思います。親子だからこそ冷静に話せないのではないのでしょうか？

逆を言えば、思っていることを直接言い合える事が親子の良いところかもしれません。上下関係が他人であれば経営者にも申すのは大それたことと思う人もおります。親子だからこそ良い面や

悪い面を思いつきりぶつけ合う機会が多いが、お互いに言い合ったことを実行できずに成長できない事が多いように思います。

親はどこまでも親、子はどこまでも子、高木様がおっしゃるように子供は親を選べないのですよね。この問題は家業を引き継いできた先輩たちも通ってきた道なのでしようが、同じ問題の繰り返し返しの様な感じがします。私自身はこれからどうすべきかを山形を離れ、群馬の地で感性を磨き、じっくり考え答えを導いていくつもりです。

平成二十五年十二月吉日

敬具

安達 勝夫 （あだち かつお）

一九七〇年 山形県東根市生まれ  
一九九四年 日本大学農獣医学部農学科卒  
一九九四年 有安達農園 就職・就農



拜復 安達 勝夫様

松もとれ、また忙しい一年が始まりますね。

私のような年令になると、新年を迎え思うことは、一昨年も森羅万象に支えられ生かされた命なんだ、有難いことだ、折角新しい年を迎えられた生がされている命を、心身健全に努め精一杯使わせていただくこう」ということです。

貴兄は新年を迎えどのような思いを抱かれたでしょうか。

お手紙を読んで、私がこれまで知り合った貴兄のような親のあとを継ぐお立場の農業経営者、製造業、流通業などいろいろな業種の方々の顔が次々と思い浮かびました。

経営規模の大小を問わず、共通していたのは「プレッシャーと感じている」ということです。

もちろん現在進行形の方も、過去形になった方もいろいろですが、その対応に共通しているのは「組織」の一員と割り切ることから「プレッシャー」対策の一步を始めていることのように思いました。

私など公務員経験者は、民間企業とミツシヨンの違いはあれ、「組織」の一員として、仕事は役割分担をしながらチームで行います。

一般的にはチームのリーダーは、課長とか班長とか係長とか仕事の軽重により異なりますが、責任ある立場の者になります。

チームのリーダーにその使命・役割を指示するのはそれより上のポストの者です。リーダーは指示に従ってチームを指揮し仕事を成し遂げるのです。

組織内で地位があがるということは、権限も増えますが、責任はより一層大きなものとなります。

リーダーの仕事振りをみながら、キャリアを積んでいく過程では、「自分」の思い、勝手はじつと腹の中に仕舞い、自らがそのポストになったらそれを実行し、自らの力を試す。その繰り返しでキャリアを積むのです。

親をリーダーと考えればどの「組織」でも同じではないでしょうか。

家業もそのように考え、対応してみると面白くないのではないのでしょうか。貴兄の豊かな感性は必ず解決策をみつけ、飛躍の年とすると確信しています。

平成二十六年一月吉日

敬具

## 高木 勇樹 (たかぎ ゆうき)

一九四三年 群馬県生まれ  
一九六六年 東京大学法学部卒業後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官など歴任。

一九九八年 農林水産事務次官、二〇〇一年退官  
二〇〇二年 農林中金総合研究所理事長  
二〇〇三年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任  
二〇〇七年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長

現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

